

2009年7月12日 主日礼拝メッセージ

聖書箇所：サムエル記第一 5章1～12節

説教題：真の神はどこにおられるのか

1 神への不従順

ローマ人への手紙 11章 32節にこんな御言葉があります。「なぜなら、神は、すべての人をあわれもうとして、すべての人を不従順のうちに閉じこめられたからです。」

私たちはかつて本当の神を知らず、神に対して罪にまみれた不従順な生き方をしていました。しかし、そのことも神のご計画だったのだということです。それは、神の救いに与るために通るべき道であったとパウロは説明しています。

私これを聞いて、「えっ」と驚きます。神に逆らうことはいけないことだと思っています。罪人として生きてきたことに何か積極的な意味があるなどと考えたこともありませんでした。むしろ、過去の救われる前のことはすべて忘れてしまったほうがよい。そのようにどこかで思い込んでいます。

しかし聖書は、私たちが神に対して逆らい続けていても、そこには大きな意味があると言っています。

2 ペリシテ人の信仰

イスラエルと戦って大勝利を取めたペリシテ人たちは、イスラエルから神の契約の箱を奪ってきます。

なぜわざわざ奪う必要があったのでしょうか。イスラエルの陣地に契約の箱が到着したとき、イスラエルは歓声を上げて大喜びしました。そのどよめきはペリシテ人の陣地にも響いてきました。イスラエルの最大の望み

である契約の箱を奪えば、イスラエル人は戦意を喪失して逃げてしまうに違いない。一つには、そういう冷徹な戦略がありました。

そしてもう一つの理由があります。ペリシテ人は、かつてイスラエルの民がエジプトから脱出したときのことを先祖から聞かされていきました。不思議なことにもう四百年も昔のことであり、また敵の民族のことなのになぜかしっかりと覚えているのです。イスラエルの神は、様々な災害をもってエジプト苦しめたと言うのではないか。あの大きな権力を持っていたエジプトのパロでさえ彼らの神にかなわなかった。今、イスラエルの神はペリシテ人に勝利を与えてくれた。そのような力を持つ神の契約の箱をみすみす見逃すわけにはいかない。自分たちのところに持ってきたら、これはもう鬼に金棒だ。

そんなことを考えながら、彼らは契約の箱を奪い、ダゴン神社のダゴン像のかたわらに置きました。ペリシテ人も神を拜んでいました。どんな神を拜んでいたのか。彼らがしていることを見ればわかります。ダゴンの神もイスラエルの神もいっしょにしている。ひとこと言えば、どんな神でもいい。ありがたいと思う神は何でも拜もう。そういう神観でした。

これとよく似た国がどこかにあります。一つの家には神棚もあれば、仏壇もある。神と言っても恵比寿様も言えれば、大黒様もいる。聖書は、私たちにはまったく遠い世界のことと思われがちですが、意外に似たような考え

を持つ人たちがここにいるのです。

2 人の手に運ばれる神の箱

契約の箱はまずペリシテ人が中心都市アシドデに運ばれました。ダゴン神社に安置されました。しかしすぐに異変が起きます。ダゴン像がばらばらに壊れて倒れるという気味の悪い事件が起きました。そればかりではなく、疫病のようなものが蔓延します。相談の結果、山奥にある町であるガテに移すことにしました。

ところが、そこでも疫病が発生しました。町は大恐慌となります。今度は、エクロンと呼ばれるこれも山奥にある町に運ばれる。ところが、エクロンの人々はすぐに反対運動を起こします。「私たちのところにイスラエルの神の箱を回して、私たちと、私たちの民を殺すのか。」

今の時代も産業廃棄物や核廃棄物、迷惑なお荷物は大都市から遠く離れたところに捨てようとしています。いつの時代も同じことを繰り返しているのです。最初はありがたいと思って持ってきた箱が、実は大変に迷惑なものだった。だれも引き取ろうとしない。しまいには処分に困り果て、お互いに箱を押しつけあって争っている。

ここを読むと、契約の箱は好き勝手な人間の考えのままに振り回されてばかりいるように見えます。

ところが、実際は逆です。ダゴン像は砕け散り、疫病が蔓延し、人々は大きな恐怖に襲われていきました。目に見えない恐怖です。何とも重苦しい恐ろしさです。神は目に見えない存在でありながら、確かにすべてのことを御支配しみわぎを為しておられます。

3 死ぬべき者への救い

(1) 死：人の罪のゆえに

第一サムエル記 4 章には、イスラエルの人々三万人が疫病で打たれたとありました。そして、この 5 章でも病気が発生し、死んだ者たちが多く出ました。

私たちは考えます。「神さま。どうしてあなたは、こんなに多くの人たちを簡単に殺してしまうのですか。神の愛はどこにあるのですか。あなたのあわれみはどこにあるのですか。」

確かにペリシテ人は不従順な人たちではあったでしょう。契約の箱をダゴンの神と一っしょにしてしまったのは、愚かなことだったかもしれない。でも、だからと言って死ぬほどの罪なのですか。

皆さんの中には、車を運転していて速度違反の取り締まりを受けた方もいるかもしれません。捕まった人の中には、警察に怒りをぶつける方もいると聞きます。自分で違反していながら、怒り出す。冷静に考えればおかしな話です。私たちは、ときどき神に対してこれと同じことをします。

ロマ書 6 章 23 節に「罪から来る報酬は死です」とあります。神に対して罪を犯した者の結果は確かに死なのです。神が厳しいのはありません。厳しい結果を招いているのは人間の側であることをまず覚えなければなりません。

しかし一方、神はさばきの神であるということだけなら私たちはとっくの昔に滅ぼされていたはずで、ところが、今私たちは救いをいただきました。神は救いの神でもあります。

(2) 救い：「町の叫び声は天にまで上った」

この箇所はどこに救いの神が示されているのか。疑問に思うでしょう。12節の御言葉に示されています。「死ななかった者も腫物で打たれ、町の叫び声は天にまで上った。」

あまりの苦しみから、彼らは助ける求めて叫び声を上げました。いったい誰に対して助けを求めたのでしょうか。彼らが信じてきたダゴンの神でなかったことは確かです。彼らは自分の口で言っています。「イスラエルの神は、私たちの神ダゴンをひどい目に合わせる。」ダゴンの神に願っても、この神は自分たちを救えないと知ったのです。

ではいったい誰に対して助けを求めたのでしょうか。

4 叫び声を聞かれる神

(1) 助け求めて叫ぶとき

もう一度 12 節を読みます。「町の叫び声は天にまで上った。」この「叫び声」という言葉、聖書の中では必ず神に向けて助けを求めるという意味で使われる特別な言葉です。そうしますと、ペリシテ人は意識していなかったかもしれませんが、彼らが叫んだ叫び声はイスラエルの神の耳にまで届いていたということです。そして、神が待っておられるのは、実にこの叫び声であったということです。

神はどのような者を助けるのかご存じでしょうか。私たちは単純に考えています。「神は、私たちが大変な目に会う前に助けてくれるべきだ。困ってから助けようとするのは、遅すぎる。」

しかし一方ではこうも考えます。自分が必要をまったく感じていないのに、他の人から突然「あなたを助けます」と言われたらどう思いますか。かえって迷惑に思います。「私

の生活に口出ししないでください」と言って怒ります。

私たちは矛盾したことを平気で口にしてある。「困る前に助けて欲しい。でも、困ってもいないのに“こうしなさい”と言われるのはごめんだ。」

では神はどうされるのか。私たちの人格を大切にされるお方です。こちらが願ってもいないのに一方的に何かをなさる方ではありません。私たちを愛するがゆえに、私たちが心の底から「助けて欲しい」と願うまで、辛抱強くお待ちになります。神は絶対に私たちの意志を無視してまで手を出すお方ではありません。その代わりに、一旦「助けて」という叫び声を聞けば、神はまるで救急車が出動するように、走って行って手を差し伸べるお方です。

(2) 神は必ず叫びを聞かれる

神が人々の叫び声を聞かれ、実際に救いの作業に向かわれる様子が、出エジプト記の最初のところにあります。神がモーセを召し出していく場面です。なぜ、今神はモーセをエジプトに遣わそうとされるのか。そのきっかけはこうでした。2章 23 節。「イスラエル人は労役にうめき、わめいた。彼らの労役の叫びは神に届いた。」

その叫び声を聞かれた神はモーセにこう言われました。「わたしはエジプトにいるわたしの民の悩みを確かに見た。追い使う者の前の彼らの叫び声を聞いた。わたしは彼らの痛みを知っている。わたしが下ってきたのは、彼らをエジプトの手から救い出すためだ。」

(出エジプト 3:7, 8a)

「わたしは彼らの痛みを知っている」と言われます。頭の知識として情報として知って

いるという意味ではありません。神御自身もごいっしょになって痛みを覚えておられる。彼らの苦しみとごいっしょになっておられる。その苦しみがどれほど大変なことなのか、神も実際に味わっておられる。だからこそ居ても立ってもいられずに、神はモーセのところを下ってこられる。

神は、私たちが救うために大きな犠牲を払うことも厭わないお方です。ご自分のひとり子が私たちの罪のすべてを負い、身代わりとなってさばきを受けられる。それほどの犠牲を払ってまで、私たちが救おうとされるのです。

(3) 真の神はどこにおられるのか

私たちはどのようにして神に出会ったのでしょうか。ひとそれぞれですが、順調な中で神に出会えたという方は希でしょう。むしろ、つらいところ、苦しいところを頑張って苦しみの中で「助けてください」と叫んで、すがるような思いで神に出会った方が多いのではないのでしょうか。

私たちは神に対して不従順な歩みをしてきました。他の神々を平気で拝みました。神を自分勝手な思いの中で利用しようとしてきました。神を味方につけて、成功しよう。幸運を勝ち得よう。そんなことしか考えていませんでした。それが神なのだと思い込んでいました。

しかし本当の神はどこにおられるのでしょうか。ダゴンの神は頭も腕ももぎ取られてしまいました。私たちは木や石を削って作った像をありがたく拜んでいただけだったのです。本当の神は別のところにおられました。見えない方です。見えないけれど、私たちのいのちを支配し、私たちの心の中にある全て

の汚れた思いも知っておられます。だからと言って、裁判官のように私たちを責め立てる方ではありません。

むしろ、不従順な態度をしている私たちを見捨てることなく、あわれもうとされている。私たちがたとえ不従順な態度をとったとしても、神はそれを完全にひっくり返して、神のあわれみで満たしてくださる。不従順な態度を取った結果、私たちが困り果て、二進も三進もいかなくなつて「助けて」と叫ぶとき、神はその破れたところから入ってきてくださったのです。

自分の好き勝手なことをしておいて、困ったときだけ「助けて」と叫ぶのは無責任なのではないかと感じる方もおられます。同じ事を感じていた人が福音書に登場します。イエスの隣で十字架にかけられた強盗はイエスにこう願いました。「イエスさま。あなた御国の位にお着きなるときには、私を思い出してください。」(ルカ 23 : 43)

不従順な生き方をしてきた強盗は「助けて」とはとても言えませんでした。その代わりに「思い出してください」と遠慮がちに願いました。イエスは言われました。「まことにあなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」イエスは十字架におつきになりながら、強盗のために救いの緊急出動をなされました。

「助けて」と叫ぶことができない自分だ。もしそんなふうにお感じになる方がおられるのであれば、「私を思い出してください」というささやかな願いであっても構わない。

神は、不従順な者と同じようなお姿となりました。不従順な者といっしょに歩まれました。不従順な者のためにいっしょに苦しまれました。そして、この強盗の手を取り天の

御国へ引き上げてくださいました。

どれほど深い神のあわれみが、私たちを取り
囲んでいたのか、改めて覚えたいと思いま
す。